



Title	1930-40年代西ケープにおける缶詰産業の成立：南アフリカの第二次工業化と地域経済
Author(s)	宗村, 敦子
Citation	アジア太平洋論叢. 2014, 20, p. 123-149
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/100111">https://hdl.handle.net/11094/100111</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 1930-40年代西ケープにおける缶詰産業の成立

## －南アフリカの第二次工業化と地域経済－

宗 村 敦 子\*

### はじめに

19世紀末から後発的に工業化を果たした多くの地域にとっては通常、労働力は最も手に入れやすい資源であった。このような地域では、差別的制度によって、安価な労働力を獲得できる状況が意図的に形成されたと言われる<sup>1</sup>。南アフリカ共和国（以下南ア）では、アパルトヘイトの経験が、特殊な工業化の土台といかにかかわってきたか、が問われてきた。1970年代末からは綿密な調査が行われ、南ア経済史家たちは、19世紀末以降、現地労働者（本論文ではアフリカ人労働者とする）が差別的制度により生じた農村の深刻な貧困化を受けて、金鉱山での労働を強制される経済的メカニズムを論じてきた<sup>2</sup>。

このようにして南アが南部アフリカ経済の中心地として発展した過程では、政府が政策によって、鉱山業に従事させるための移民労働者の確保を促したことが強調されてきた。鉱山業では、金含有率が少ないという南ア産金特有の制約があり、アフリカ人労働者の人件費は常に最小限に抑えられなければならなかつた。資源革命と呼ばれる最初の工業化が行われた鉱山業では、アフリカ人労働者の移動を制限する労働パス制度や、労働者の一時的な居住施設（コンパウンド）などが導入された。そのような制度はアパルトヘイト期（1948～1994年）の労働者の管理体制としても継続して用いられたため、南アの工業化論では、その特殊な経路依存性が強調されてきた<sup>3</sup>。

---

\* 大阪大学文学研究科修了生

一方で、鉱山業の関連産業として生活必需品の生産から始まり、1930年代以降輸入代替化をめざし本格化した製造業には、どれほど目がむけられてきただろうか。J・ナトラスによれば南アの製造業では、機械導入や技術者の呼び込みを海外に依拠したもの、いち早く発展した分野では、雇用創出性の高さがそれらの要素よりも顕著であったという（図1・2）。食品産業は鉱山産業の関連産業として形成された代表的な産業であるが<sup>4</sup>、同産業の形成以降どのような過程を経て大量生産制に至ったのかは明らかではない。

この問題について本論文では、

1930年代から第二次世界大戦時にかけての「第二次工業化」と呼ばれる時期を取り上げ、地域経済の形成という視点から西ケープに着目し、労働力構成の変化と生産体制の変化がどのように関係していたのかを検討する。

1930年代以降の製造業の成長において地域経済と労働力の関係に注目することは、南アの工業化の「特殊性」を相対化し、特定の産業で競合する他地域との類似点を見つけることにもつながる。これは、先進国も発展途上国も工業化的過程では、多かれ少なかれ機械化や労働者の代替による労働力構成の複雑化を経験しているからである。そのような経験について南ア史学においても理論的な議論が蓄積されつつある中で、本論文は西ケープ内陸部の農業に依拠した缶詰産業の形成をとりあげたい。

ここで問題となるのが、1940年代までの機械導入と労働力構成の変化の複雑

図1 製造業における各部門の雇用の割合

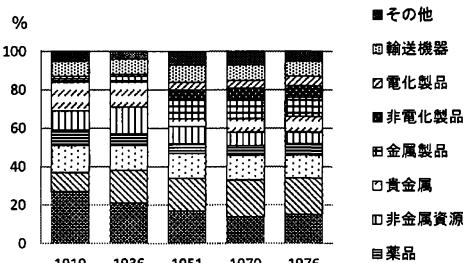
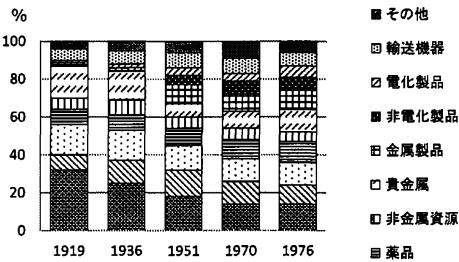


図2 製造業における各部門の生産量の割合



出典：J. Nattrass, *The South African Economy: Its Growth and Change*, Oxford, 1981, p. 170, Table 8-4 から作成。

な関係である。すなわち1920年代以降の南アでは、「文明化政策」の名のもとに、白人労働者が積極的に失業からの保護を受け（新しい職業が用意されるか、アフリカ人労働者の職と代替され）、一方アフリカ人労働者は安価な賃金で雇用され続けた。この時実際に企業がどのようなバランスと目的をもって両者を雇用していたのかという点に、経済史家たちの関心が集まった。企業にとって人件費の削減は常に最優先とされたが、それでもアフリカ人労働者だけが雇用される状況が生じたわけではなかった。これまでの研究では、白人非熟練労働者が多くの製造業部門で監督職の地位を獲得した<sup>5</sup>ために、結果的に「多人種構成」の職場が形成されたと主張された<sup>6</sup>。

しかしこの第二次工業化の社会的影響をめぐる評価は様々である。とくに1930年代に起こった機械化が労働力構成にもたらした影響をめぐっては、機械化の社会的影響を論じるJ・レウィス（J. Lewis）と、戦時の女性労働者の動員を論じるP・アレクサンダー（P. Alexander）との間では意見が分かれる。レウィスによれば、1930年代に企業の間では「科学的経営」と呼ばれる新しい経営概念が注目を浴びた。この経営概念のもとで、経営者は新しい機械を操作できる技術者を多く雇用し、また彼らの工場での監督権を強化することで、それまで熟練職人が担った作業を、半熟練ないし非熟練労働者に分担させることに成功した<sup>7</sup>。レウィスは、この「脱技能化」によって、1930年代まで進出することのできなかったアフリカ系労働者が半熟練職人として工場で雇用されるようになった、と指摘する。

一方、アレクサンダーは、固定資本の増加は労働者数の推移と、戦時インフレを加味すると、戦時需要を支えるための一時的な変化に過ぎないと反論する。彼によれば、機械化は中途半端に終わり、そのかわりに、労働省戦時人員局が半熟練職の職務に対し、白人女性労働者を多く起用する政策をとったという<sup>8</sup>。ただしこの研究では実際に女性の登用が製造業にいかに反映されていたのかという問題に言及されていないため、本論文では戦時の生産体制までの女性労働者の雇用事情も検討対象に加える。まず、1930年代における南アの経済政策に対する西ケープ地域の農業の対応から、缶詰産業が形成された条件を整理していきたい。

## 1. 西ケープにおける缶詰産業の成立

### (1) 1930年代の保護貿易政策と缶詰産業

南ア史では第二次工業化とは、スマッツ政権（1933～48年）による自国産業の保護政策を受けた、製造業の発展をさす。スマッツ政権は、1910年にイギリス植民地統治から自治政府を認められた当初の政権でもあり、積極的な国内産業の保護政策を推し進めた。もともとこのような政策は、鉱山業への財政依存からの脱却を急務として掲げたヘルツォーク国民党政権（1924～32年）の自国産業保護政策に由来している。すなわち政府は製鉄業などの国営企業を設立し、また製造業部門の保護政策を開いた<sup>9</sup>。保護貿易に関してヘルツォーク政権は、従来通り自由貿易の継続を主張する鉱山企業らの鉱山会議所（Chamber of Mine）の反対を押し切り、1925年に関税法を通過させた。以降南ア政府は多国間通商協定を結びつつ、イギリス帝国経済内で差別的関税制度を巧みに駆使し、とくに第一次世界大戦後から流入するようになった安価な日本製品から、国内産業を保護しようと試みた<sup>10</sup>。

このような保護政策を受けた製造業は、世界恐慌から早くも1930年代に南ア経済が回復する中で劇的に発展した。スマッツ政権は、ヘルツォーク政権の保護政策を引き継ぎ、財政政策で公的債務を占めた外債を整理することに成功した<sup>11</sup>。また対外貿易の大半は対英輸出に占められていたものの、1935～36年には、英・仏に続き日本が新たな輸出先として浮上した（表1）<sup>12</sup>。

輸出產品では、金・羊毛に次いで農産物輸出が多くを占めたが、生鮮野菜や果物の他にも加工食品が輸出されるようになった。これは、1932年に設立されたマーケティング委員会が、周辺国からの農産物の輸入を引き締め、販路や価格を統制することで、南アの農産物輸出を奨励したためであった<sup>13</sup>。また農業部門は、優先的な鉄道関税や白人農場主へのランド・バンク（Land Bank<sup>14</sup>）を通じた積極的融資など手厚い助成政策を受け、政府歳入の改善による恩恵を享受していた<sup>15</sup>。

農場主はこのような農業保護政策に呼応して、1933年から商工局（Board of Trade and Industry）に関税引き上げを求めた。この要求には、農産物の輸出先の

表1 1935-1936年の主な貿易取引相手国

取引先	1935			1936		
	輸入	輸出	収支バランス	輸入	輸出	収支バランス
イギリス	36622	84276	47654	39953	95638	55685
フランス	806	2786	1980	793	2849	2056
北ローデシア	424	2000	1576	501	1785	1284
西南アフリカ	821	1100	279	669	1337	668
ベルギー	1707	1978	271	263	420	157
オランダ	827	968	141	997	929	-68
ドイツ	3892	3888	-4	3066	2397	-669
イタリア	891	706	-185	2583	1791	-792
スウェーデン	1357	161	-1196	1451	218	-1233
インド	1640	128	-1512	1660	185	-1475
カナダ	2642	769	-1873	4931	2425	-2506
日本	2657	486	-2171	3075	270	-2805
アメリカ	12747	665	-12082	16149	1082	-15067

出典：League of Nations, *International Trade Statistics*, 1933, 1935, 1936 から作成。

単位はポンド・£。取引先は収支バランスが高い国から低い国順に配列。

大半を占めていたイギリスとの関係が大きくかかわっていた。1910年以降、イギリス・コモンウェルス諸国に向けた農産物輸出には3%の優先割引が適用されたが、1925年にこの制度は失効した。南ア農場主がイギリスやコモンウェルス諸国との自由競争を恐れ、同制度に代わる自国の農産物輸出への保護を求めた結果、1934年に関税引き上げが実施された。

農場主が参加する南アフリカ缶詰製造評議会（South Africa Canners' Council）は、農産物への賦課関税の見直しに乘じ、豆缶、アスパラガス缶、スイートコーン缶など多様な加工食品への関税賦課を求めた<sup>16</sup>。結果食品部門全体では生鮮果物とドライフルーツが輸出量を伸ばし、加工食品としてのジャム加工、缶・瓶詰果物や野菜もそれにつづいて増加した<sup>17</sup>。通常南アの缶詰産業史では、水産物加工の開始が（主にザリガニ缶）が農産物加工に先んじていたが、1934年に輸出先フランスの輸入禁止措置を受け、大打撃を受けた<sup>18</sup>。本論文では、このような生産状況から、農産物、その中でも桃や梨、シトラスなど落葉性果実の加工品を主な食品加工製品とする。

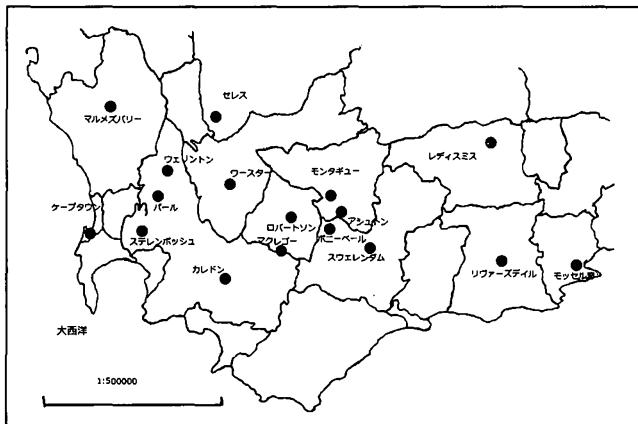
ナトラスによれば製造業は、第一次大戦前から人口が集中した都市において「でたらめに」形成され、食品産業は鉱山業のあった北方を中心に形成されたという<sup>19</sup>。しかし結論から言うと、1930年代に工業地帯の多極化が起こる中、缶

産業は原料調達と輸送、労働力供給を鑑みて都市ではなく農村において形成された。次にこのような事情を地域経済の視点と照らし合わせ、なぜ西ケープにおいて食品缶詰産業が形成されたのかを見てみたい。

## (2) 工場建設計画の浮上

ステレンボッシュ（以下地名は地図1を参照）からケープ内陸にかけての地域には、今でも500ヘクタール以上の大規模農場が集中している。もともと西ケープ、ナタール両州は「果樹園ベルト」と呼ばれるほど果物栽培が盛んであり、また缶詰産業が形成された。19世紀末以降農場では、小規模な加工用器械が置かれ、商品価値のない果物・野菜が加工されていた。たとえば、形の不揃いな桃や洋梨、パインアップルは圧搾やカットによりジュースや缶詰となっていた。通常一つの農場内にはいくつかの加工設備が設置され、生産ラインは季節ごとに異なる収穫物に合わせて組み替えられていた<sup>20</sup>。

地図1 南ア西ケープ州南西部の町村



1930年代末までは、西ケープの主要な加工品である桃缶生産は世界的な生産額の中でも微々たるものにすぎなかった。1933年の世界生産量の1535万ケースのうち、1353万2000ケースのアメリカ缶が出荷され90%を占めた<sup>21</sup>のに対し、南ア缶はわずか1万3177ケースしか出荷されなかつた<sup>22</sup>。これに対し以下で説明す

る、1940年に持ち上がった西ケープ内陸での工場建設計画では、1シーズンにつき20万ケースを生産することが目標とされた。最終的に桃缶の出荷数は、1945年に14万563ケースにまで達した。

1930～40年代にかけての食品加工工場は、圧倒的に西ケープに集中して形成された。西ケープ州では野菜・果物の瓶詰・缶詰、ジャム、ドライフルーツの加工工場が置かれ、それに次いで工場の多いナタール州には、野菜・果物の瓶詰工場が設置された。缶詰産業は、第二次世界大戦による戦時経済の恩恵を受け、西ケープ州とナタール州では工場が増加し続けた（表2）<sup>23</sup>。ケープへ工場が林立した背景には、大規模農場が集中していたことに加え、1930年代後半からの鉄道建設という要因が挙げられる。すなわちウースター、アシュトンの二つの町は、ヨハネスブルク、ケープタウン、ポートエリザベスの3都市へつながる鉄道網の、積み替えハブとして機能した。とりわけ西ケープ北部からの積荷には比較的重い瓶詰も含まれたため、缶・瓶詰産業は輸送コストを鑑みて、

表2 1936-1944年 の食品加工工場の分布

ドライフルーツ								
	ケープ	ナタール	トランスクヴァール	オレンジ自由州	連邦	西ケープ	ポート・エリザベス	ダーバン・パインタウン
1936-37	8	0	0	0	8	0	0	0
1937-38	7	0	0	0	7	0	0	0
1941-42	7	0	0	0	7	0	0	0
1942-43	4	0	0	0	1	0	0	0
1943-44	5	0	1	0	6	1	0	1
パック加工品								
	ケープ	ナタール	トランスクヴァール	オレンジ自由州	連邦	西ケープ	ポート・エリザベス	ダーバン・パインタウン
1936-37	14	6	3	0	23	8	1	6
1937-38	15	7	2	0	24	8	1	7
1941-42	17	7	1	0	25	10	1	7
1942-43	17	7	1	0	25	10	1	7
1943-44	18	7	1	0	26	10	1	6
ジャム・缶詰など								
	ケープ	ナタール	トランスクヴァール	オレンジ自由州	連邦	西ケープ	ポート・エリザベス	ダーバン・パインタウン
1936-37	8	1		0	11	4	1	1
1937-38	7	2	3	0	12	4	1	2
1941-42	12	2	3	0	17	5	1	2
1942-43	14	2	4	0	20	6	1	2
1943-44	13	2	7	0	22	6	1	5

出典 : Report of the Agricultural and Pastoral Production, U.G.12/1932, U.G.44/1935, U.G.54/1936, U.G.59/1937, U.G.18/1939, U.G.31/1940, U.G.27/1941, U.G.77/1948, U.G.57/1949, U.G.30/1950 から作成。

最も本数の多いケープ便に依拠した<sup>24</sup>。

1930年代の西ケープ内陸部における変化を受けた工場の建設によって、それまでの農場における農産物の再加工とは明確に区別すべき加工産業の発展が見られた。この地域における工場建設は、農場主S・コンラディ（S. Conradie）を中心として計画され、1941年に実現された。この計画には、モンダギュー、ロバートソン、スウェレンダム、ボニーベール、マクレゴー、バリーデイル近郊の農場主600人が参加しており、果物農場は98%が加盟した。

この計画ではランドバンクから2万7000ポンドが借り入れられ、また地方区画委員会（Local Divisional Council）から5ヘクタールの土地が購入された。同時に、南アでは冷蔵施設が2か所しか存在しなかつたため、農場主が共用する倉庫や冷蔵施設がスウェレンダムに建設された。ほとんどの機械や備品は国内では入手できなかつたため、コルク装置はポルトガル、冷蔵コンテナやコンプレッサーはイギリス、巻き締め機（缶の真空・密封処理を行う装置）はアメリカから購入された。

運送事情の改善に後押しされてランゲベルク社が設立されたのと同様に、ウスターのガンツ社（Gantz）、セレスのセレス社（Ceres）などとほぼ同時期に持ち上がっており、企業の設立のための前向きな合議が近隣の農場主間で形成されていた<sup>25</sup>。工場と農場主の関係は、ランゲベルク社が密接な協力関係を築いていた。モッセルベイ、リヴァーズデイル、レディスミスには、農場主からの依頼を受けて1944年に第二工場が建設され、農業協同資本（Cooperative）はケープ東西境界域にまで広がっていた<sup>26</sup>。

### （3）生産の事情

農産物加工産業では、ジャム生産が全体の生産高の6～7割程度を、また缶詰生産が1～2割を占めていた（表3）。主な市場は、国内市場、防衛省、イギリス食糧省、政府契約、商船とその他の商業輸出に分けられ、第二次大戦まで対外輸出は年々増加した。たとえばジャム生産は1933～1945年にかけて6%から67%に、缶詰・瓶詰生産は4%から76%にまで増加した<sup>27</sup>。商工局はオーストラリアを意識しながら、輸出市場獲得とコスト削減によって競争力を強化す

表3 食品加工業生産高の推移

年	ジャム・ゼリー・マーマレード	缶づめ・瓶づめ果物	皮・果物の砂糖漬け	ドライフルーツ	甘味製品	その他	総計
	ポンド(£)	ポンド	ポンド	ポンド	ポンド	ポンド	ポンド
1928/29	357,636	126,552	-	-	-	33,474	517,662
1929/30	366,110	156,340	48	-	-	57,368	579,866
1932/33	314,682	177,146	-	-	-	45,508	537,336
1933/34	376,420	199,747	895	412	-	49,158	626,632
1934/35	428,526	179,234	930	500	-	46,817	656,007
1935/36	438,367	356,180	2,779	1,400	-	27,157	825,883
1936/37	452,319	225,455	1,325	-	-	93,489	772,588
1937/38	464,616	307,242	4,923	-	5,052	124,376	906,209
1938/39	513,473	260,077	4,700	-	5,650	149,287	933,187
1939/40	738,998	340,387	5,474	-	7,350	268,154	1,360,363
1940/41	1,368,065	453,108	28,805	-	10,500	757,162	2,617,640
1941/42	1,988,523	397,878	61,618	13,650	11,600	798,036	3,271,305
1942/43	1,980,346	569,315	29,317	-	19,696	849,822	3,448,496
1943/44	2,676,226	929,705	51,804	2,572	16,338	1207327	4,883,972
1944/45	3,214,595	790,871	59,225	-	41,105	1603890	5,709,686

出典：Report 296, p. 12, Table 9.

ることを缶詰企業に求めた。

缶詰企業は政府からの要求を受けて対外輸出製品の増産を目指す一方、不安材料を抱えていた。もともとケープの農産物加工は缶を用いることで、瓶詰を輸出して他のコモンウェルス諸国よりも低廉な価格を提示することができた。しかしイギリスからの輸入に依拠していた、缶の原料であるブリキ板の価格が高騰し、企業は瓶詰へ切り替えることでこれに対処しようとした。瓶詰への切り替えは輸送費のコスト増大を意味し、これを埋め合わせるための製造コストの切り詰めが必要となった。こうしたパッキング費用に加え、果物の原価、砂糖の価格、工場の生産ラインの動力にかかる燃料費、電気料金、水道料金もそれぞれ高騰したため、企業は政府からの要求に苦戦した<sup>28</sup>。

パイナップルやマーマレードなどのジャム生産では、砂糖代が製造コストの60%を占めた。また西ケープ特産品のケープ・グズベリー（セイヨウスグリの実）は他のジャム加工用果物に比べても原価が高く、生産量自体も限られていた。缶詰生産でも、特産品の桃、洋梨は仕入れ値が高く、企業は戦時に、原価の安いプラムや杏子を用いるようになった。果物の仕入れ値や、砂糖代の高騰は価格を大きく左右した一方、戦時の価格統制を受けて、卸売り価格に製造コストをも上乗せできず、企業は最低限必要な原料費の切り詰めをあきらめた。

したがって缶詰企業は、原料費の代わりに人件費を極力抑え、その努力は商工局からも称賛された。ジャム生産では、1ポンドあたりのコストの7～10%程度が人件費にあたり、缶・瓶詰生産でも1ポンドあたり15%前後を占めているにすぎない。缶・瓶詰生産の人件費がより多くかかるのは、缶詰に入れるカットフルーツを作るための、下ごしらえをする人手がかかるからであった。それでもなお人件費が占める割合は、原料の原価に比べはるかに低かった<sup>29</sup>。

## 2. 労働力構成の変化

### (1) 工場への季節労働者の進出

人件費の削減を必要とした缶詰企業は、1930年代から移動労働者として新たに西ケープの農場で雇用されるようになった季節労働者を、工場でも利用していた。農場における季節労働者の雇用は、1930年代以降、ヨハネスブルク、ダーバン、ポートエリザベス、ケープタウンなどの都市部への人口流入と関係している<sup>30</sup>。すなわちケープ内陸から東ケープにかけての農村部では、土地放棄が顕著となり、1910年代以降アフリカ人小作農と白人農場の関係を結んでいたテナント制度（年間10シリングを地代として納める小作農制度<sup>31</sup>）が衰退した<sup>32</sup>。カイ地方（東西ケープの境界域）を除く西ケープ州で減少したアフリカ人小作農は新たに、白人農場主によって賃金労働者として雇用され、「季節労働者」と呼ばれた。季節労働者は、耕作や脱穀、収穫など、季節性のある作業のために雇用され、契約が満期になると新たな契約を求めて別の農場へ移動した。同時代に農場で聞き取り調査を行ったE・S・ヘインズ（E. S. Hains）によると、1930年にはパール、ウスターで6万7060人が、シスカイ・トランスクイ地方では1100人が、ポートエリザベス、イーストロンドン、ケープタウン近郊では5万8000人が季節労働者として雇用されていた<sup>33</sup>。

また西ケープ内陸地域では19世紀末以来の、「カラード」のミッションステーションが集中し、その出身者が季節労働者として多く雇用された。彼らは白人農場主から賃金労働者として雇用され、彼ら自身が農地を所有することは稀であった。オレンジ自由州とトランスクワール州ではアフリカ人労働者が、ナター

ル州ではアフリカ人労働者とアジア人労働者が雇用された一方で、カラード労働者は西ケープ州の白人農場で最も多く雇用された<sup>34</sup>。

季節労働者には女性労働者も含まれ、彼らは農閑期までを契約期間として、白人農場主によって雇用された<sup>35</sup>。季節労働者は一世帯あたり平均2シリングを受け取った。西ケープの町ごとにまとめた表4では、現金収入以外に食事などが提供された正規雇用労働者（左項目）の契約形態も認められるが、このような雇用が行われたことは稀であった。現金収入のみの農業労働者（右項目）は、失業すると他の農場での契約を探し、農業以外の産業には雇用されなかつたため、非正規雇用労働を渡り歩いた。季節労働者の世帯収入は日給で2シリングであり、妻も農場労働や家内労働に携わることで少ない世帯収入を補つた<sup>36</sup>。

このような季節労働者に着目し、西ケープの缶詰企業は、農場労働者を農閑期に合わせて、工場労働者として雇用した。季節労働者を工場に雇用する点は、たとえば日本やアメリカにおける缶詰産業とも共通している。それは1930年代の缶詰製造技術に合わせて非熟練労働が製造工程の半分以上を担つたためである。いずれの国でも共通して、非熟練職には、独身の女性・児童や家族全体、ないし外国人労働者（日本の場合は朝鮮系労働者、アメリカの場合にはメキシコ人労働者）が雇用されていた<sup>37</sup>。ただし南アの場合、企業が労働者を安定して雇用する工夫が行つていた<sup>38</sup>。

1941年に創業されたランゲベルク社は、周辺地域からの通勤事情を改善するために同年10月1日に50ヘクタールの土地を購入した。コンラディードルプ

表4 西ケープにおけるカラード農場労働者の賃金形態(1933/34年)

	食事つき		食事なし	
	月払い	日払い	月払い	日払い
ブルーム・ ファンティン	10	0	0	0
カレドン	40.0-45.0	1.6-3.0	0	2.0-3.6
ケープ	25.0-30.0	2.0-3.0	0	0
カーナヴァン	10.0-20.0	0	0	0
イースト・ ロンドン	20	0	0	0
ジョージ	0	1.0-1.6	0	2.6-4.6
ヘルツオーカー	0	0.6-1.6	0	0
レディ・スミス	0	1.6-3.0	0	2.0-2.6
マルメズベリ	20.0-30.0	1.3-2.3	0	2.0-3.0
パール	0	0	0	2.0-3.6
ポートエリザベ	10.0-20.0	0	0	0
ステレンボッシュ	0	1.0-3.0	0	0
ヴィクトリア・ ウェスト	15.0-20.0	0	0	2.0-2.6
ウスター	0	1.6-2.6	0	0

出典：Report of the Commission of Inquiry, Appendix 20, p. 285  
から作成。単位はシリング・s.、ペニス・d.

(Conradie Dorp) として知られる分譲地では、はじめに30軒の住宅が建設された。もともと会社は近隣の白人従業員のための住居の提供を目的としていたが、1950年までには、ドルプにはカラード、アフリカ人労働者世帯も入居した。その結果、1951年まで建設が続けられたドルプには、700人のカラード労働者と、600～800人のアフリカ人労働者が居住していたのである<sup>39</sup>。

## (2) 缶詰の製造工程

このようにして工場に進出した季節労働者は実際に、製造工程のどの作業を担っていたのだろうか。ここでは、1930年代の缶詰の製造工程を確認していきたい。果物と野菜のいずれの場合でも、工程は大きく分けて「選別」・「予備処理」・「肉詰め」・「密封」・「殺菌」・「ラベルはり」・「出荷」の7工程の手順を踏んでいる。

上述のように、もともと西ケープにおける缶詰生産は余剰農産物の加工と商品化に起源があるが、1930年代の後半からの大量生産体制では、加工用農産物が用いられた。とくに桃缶の生産の場合、桃が完熟になると輸送中にいたみ出し、また雨が降ると実にひび割れができるため、熟さないうちに実を摘み取る必要があった。収穫物は、クーおよびバリーデイル（スウェレンダム）に建設された農場共用の倉庫内に運び込まれる。選別された農産物は、水で洗浄され、下ごしらえのための、「予備処理」を施される。農産物が水煮・蒸煮された後、皮むき、種取り、さやむきなどが手作業によって行われる。このような予備処理の作業を担っていたのは、女性労働者であった。剥皮された農産物は、見栄えを整えるため、酸化・変色防止用の漂泊剤と着色剤が吹きかけられた。

次に予備処理された農産物を缶詰に詰める作業が「肉詰め」である。肉詰めのち、果物の場合には砂糖水が、野菜の場合には食塩水が、または調理加工品の場合にはトマトピューレなどが注液される。以降の作業は工場内のライン作業で行われ、注液後の缶は軽量人による内容量検査を受ける。内容量検査には動作マニュアルが定められており、検査人は非熟練労働者とは区別され、半熟練職と同様の賃金を受け取っていた。

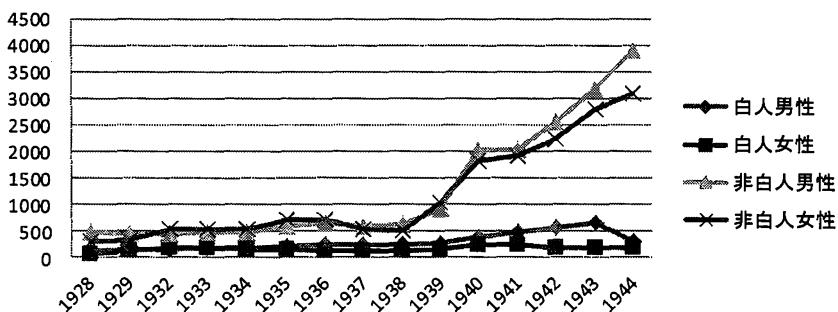
検査を受けた後、機械操作によって缶の「脱気・密封」作業が行われる。密封作業には、「巻き締め」機と呼ばれる金属板接合の機械が必要である。「巻き締

め」は、缶詰の寸法が余る個所を折り曲げて、接合箇所の二枚の金属板を丸く処理する技術であり、容器の缶の製造技術にも用いられていた。密封作業の原理には3つの動作があり、「リフト」(缶詰を下から持ち上げる)「チャック」(上から蓋を押し付ける)「ロール」(缶を回転させながら接合箇所を折り曲げる)を一度に行なうことで、毎分20缶から30缶の巻き締めができた。1930年代、缶詰産業では手動・半自動式・完全自動式の巻き締め機が用いられ、缶ではなくシーリング・ヘッド(缶の側面の縁りと、蓋の縁りをおりまげるヘッド)が回転しながら缶を真空状態にする「真空シーマー」は、当時の最先端の技術であった<sup>40</sup>。これに対し、たとえば西ケープのラングベルクの工場では、缶自体を回転させる、「半手動式巻き締め機(セミトロシーマー)」が用いられていた。

### (3) 労働力構成の変化

西ケープの食品缶詰産業における労働力構成には、1938～1940年にかけて大きな変化が現れた。図3は1928年からの白人労働者、非白人労働者の男女の増減を示している。1928～1937年にかけて一時的に、白人・非白人労働者を問わず、女性労働者が男性労働者を上回る時期があった。この背景には、世界恐慌以降の男性労働者の失業を受けて、一時的に女性が家計を支えるために工場に進出したという事情が挙げられる。

図3 南ア全体の食品産業における従業員数の推移、1928～1944年



出典：Report 296, p. 8, Table 2 から作成。

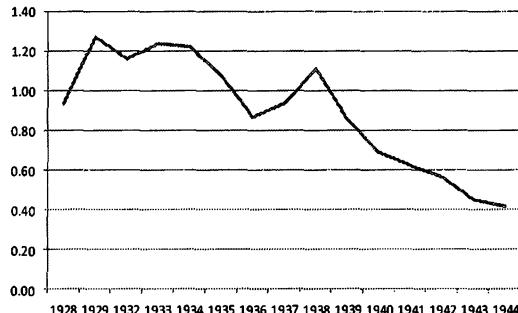
世界恐慌の影響についてB・フロイントは、1930年代後半から南ア経済が回復した後、世界恐慌中の失業の経験から、白人男性労働者は従来よりも安い賃金で雇用されることへ抵抗感を持たなくなったという。工場への職場復帰により、彼らには新しく、見回りや監督官などの仕事が用意された<sup>41</sup>。

1936～1938年にかけて白人男性労働者数は同女性労働者数を、また非白人男性労働者数は同女性労働者数を上回った。この2年間に白人男性労働者が工場に復帰したことで非白人労働者的人件費が占める割合は一度落ち込み、両者の人件費の差は、一時的に1.1倍にまで広がった（図4）。白

人、非白人労働者とも男性労働者数が女性労働者数を上回る傾向は、1940年代以降も継続した。戦時の労働力構成の特徴は、P・アレクサンダーが強調する、（白人労働者を主とした）女性労働者の大規模な動員という労働省の計画を反映していない。むしろ1940年代に白人女性労働者は、最も早く工場労働に雇用されなくなった。

工場労働者の雇用形態は、大別して季節労働者と出来高払い労働者の2種類に分類される。出来高払い労働を採用していたウースター周辺の一部地域を除き、ほとんどの工場では、週給で賃金が支払われる雇用形態をとっており、企業はこのような労働者のことを季節労働者と呼んだ。季節労働者は、農業従事期間に該当しない期間だけ、工場での非熟練労働のために雇用され、農業労働の再開と同時に解雇された。ケープタウン、カレドンを除き、西ケープ農場では日払いと2シリング前後の賃金が支払われていた。これに比べ、工場で男性労働者は週給で1ポンド7シリングを、女性労働者は1ポンド2シリングを、18歳未満の男性労働者は1ポンド4シリング、同女性労働者は19シリングを受

図4 白人労働者/非白人労働者の人件費の差の推移



出典：後掲表8の賃金表にもとづく。

け取ることができた<sup>42</sup>。農閑期に雇用される労働者は、農場労働による安い賃金を補えるほどの大きな収入を、工場労働によって短期間で得ることができた。

工場内の職務内容では労働者と半熟練職の定義は曖昧で、時に機械工のもとで作業を代理することさえあった。工場労働者は、スキルのいらない力仕事と手作業のほとんどを担った（表5）<sup>43</sup>。また半熟練労働者の賃金は、労働者の賃金と5シリング程度の差しかなかった（表6）。また親方の仕事も、女性親方

（Forewomen）の場合、女性

労働者30人に対する指導監督を任せられた、「監督官」業務であった。その監督官に至っては、アフリカ人がついていたケースさえあり、工場では労働者との

表5 労働者の職務内容一覧

職務の種類	職務内容
荷物移送	生もの・製造途中品・完成品の持ち運び
荷物移送	製品の積み下ろし
荷物移送	コンテナへの積載
木箱の準備	木箱回収
木箱の準備	貨物への焼き印つけ、印つけ、ラベルの彫刻・添付
木箱の準備	木箱の縄での固定
予備処理	野菜・果物の洗浄・種類分け・皮むき・切り分け・カット
予備処理	野菜のさやとり、果物の種とり
予備処理	肉を骨から切り取る、肉を切る
肉詰め	果物を缶に詰める
補佐	親方ないし、機械操作人の下でのコックやバルブの開け閉め
補佐	トラック運転手の助手（運転を除く）
工場内雑務	工場内の清掃、ガーデニング
工場内雑務	アフリカ人労働者のためのまかない準備
工場内雑務	手紙・メッセージ配達人
工場内雑務	工場内の機械のフィルター掃除、用具・容器の手入れ、フィルター付け外しなど

出典：Simons Collection Z.2.1.2.2, pp. 3-4 から作成。

表6 半熟練職以上の職能別週給

職種	週給				備考	
	18歳以上		18歳未満			
	男性	女性	男性	女性		
親方 (Foreman / Forewoman)	6.10.0	3.10.0	n.r.	n.r.	女性親方＝女性労働者につく責任者	
かまたき (Fireman)	1.12.6	n.r.	n.r.	n.r.		
果物 (Fruits Boiler) スープ (Soup-)・ソースボイラー (Source-)・ジュース圧搾人 (Juice Extracter)	1.12.6	1.7.6	1.7.6	1.4.6		
木槌検査師 (Hammer Tester) / ラベルはり (Band Labeller)	1.10.0	1.5.0	1.7.0	1.2.0		
機械操作人 (Machine Operator)	2.10.0	n.r.	n.r.	n.r.	修理以外の機械操作	
計量人 (Measurer)・搅拌人 (Stirrer)・包装人 (Pan Emptier)	1.12.6	1.9.6	1.7.6	1.4.6		
監督 (Supervisor)	1.12.6	1.9.6	1.7.6	1.4.6	親方の下で30人ごとに労働者を監督	
見回り (Watchman)	2.0.0	n.r.	n.r.	n.r.		

出典：Simons Collection Z.2.1.2.2, pp. 2-4 から作成。n.r.=データなし

表7 徒弟制度割り当てにおける食品産業

	食品産業(すべての年齢を含む)		全産業		パーセンテージ	
	書面契約	口頭契約	書面契約	口頭契約	書面契約	口頭契約
1936/37	155	130	7463	2722	2%	5%
1941/42	122	116	8964	2346	1%	5%
1942/43	140	85	8949	2230	2%	4%
1943/44	135	77	9854	2465	1%	3%

出典：*Census of Industrial Establishments*, UG.39/1939, U.G.21/1941, U.G.20/1945, U.G.20/1946, U.G.22/1947  
から作成。

間の暴力事件があったことも報告された<sup>44</sup>。機械操作も、機械工の監督下で労働者によって行われたことを鑑みると、作業のほとんどは労働者の手で十分まかなかえた。同時に、熟練労働者の育成のための徒弟制度の割り当ては、（報告書上での分類による）12の産業の中ではわずか5%に満たなかった。表7のように、1938～1944年にかけて、割り当ての削減はさらに進み、製造業全体では熟練職人の育成が増加したにもかかわらず、缶詰産業では割り当ては減少している。缶詰産業はこのようにして脱技能化を進めていた。

### 3. 南アにおける戦時生産体制の様相

缶詰生産は戦時の食糧生産の需要のために、さらに増加していった。ランゲベルクによれば、企業は国内の問屋組織である南アフリカ農場共同連合機構(Federated Farmers Co-Operative Association of South Africa)から対英輸出用に大口の注文を受けた一方で、ロンドンに基地を置く複数の企業から直接注文を受けた場合もあった。ただし、1940年1月、イギリス・南ア両政府を通さない直接取引を禁止する旨が、イギリス政府から通達され、これを機にランゲベルクを含む多くの缶詰企業が国内市場の開拓に目を向けることとなった<sup>45</sup>。また1941年からは南ア政府による各種製品の小売価格の固定が繰り返され、企業は製造コストの削減と苦闘していた<sup>46</sup>。

缶詰め企業の雇用者数は、白人、非白人労働者のいずれも著しく増加した。人件費は1928～1938年にかけて緩やかに増加し、終戦までには1928年の17倍、1937年の10倍に及んだ（表8）。さらに非白人労働者的人件費の推移を比較する

と、アフリカ系労働者的人件費はカラード労働者のそれと同じ程度に伸び、またその格差は縮小した（表9）。1940年以降急激に賃金が増加した背景には、戦時インフレを受けて1941年に導入される、生活手当制度による影響を著しく受けていることもある。一方白人労働者数では、1936～40年にかけて男性労働者数は200人程度、女性労働者数は30人程度増加した。

しかしカラードの男女の労働者数と、アフリカ人男性労働者数は、それぞれ2000人前後増加したため、白人男女の労働者の占めた割合は、それぞれ全体の22%から14%に、16%から9%に減少した。白人労働者とは対象的に、カラード労働者の中では、男性労働者が29%から31%に、女性労働者が23%から27%にまで増加した。工場労働への進出が遅いアフリカ人女性労働者を除き、急激な増加はアフリカ人男性労働者数にも同様に見られ、9%から18%にまで伸長した（表10）。

男女比では、いずれのケースでも男性労働者の割合が高いことから、戦時ににおける女性労働者の進出のみを強調することはできない。経営者にとって、製

表8 ヨーロッパ系と非ヨーロッパ系労働者の賃金合計

年	人件費			
	ヨーロッパ系	1928/29年 との比較	非ヨーロッパ系	1928/29年 との比較
1928/29	36,973	1	39,510	1
1929/30	50,233	1.35	39,428	0.99
1932/33	48,755	1.31	41,906	1.06
1933/34	50,657	1.37	40,879	1.03
1934/35	53,814	1.45	44,132	1.11
1935/36	60,162	1.62	55,861	1.41
1936/37	55,568	1.6	63,919	1.61
1937/38	63,241	1.71	67,185	1.7
1938/39	68,531	1.85	61,560	1.55
1939/40	80,538	2.17	94,715	2.39
1940/41	121,264	3.27	176,491	4.46
1941/42	160,558	4.34	257,491	6.51
1942/43	194,490	5.26	342,554	8.67
1943/44	236,602	6.39	526,625	13.32
1944/45	282,197	7.63	677,912	17.15

出典：Report no. 296, p. 8, Table 2 から作成。単位はポンド・£

表9 アフリカ系労働者とカラード労働者を含んだ年収の格差の変化（単位は£）

	ヨーロッパ系	37/38年 との比較	アフリカ系	37/38年 との比較	アジア系	37/38年 との比較	カラード	37/38年 との比較
1937/38	141	1	59	1	96	1	74	1
1941/42	176	1.25	80	1.36	180	1.88	91	1.23
1942/43	209	1.48	87	1.47	n.r.	n.r.	107	1.45
1943/44	232	1.65	98	1.66	221	2.30	121	1.64

出典：Census of Industrial Establishments, U.G.39/1939, U.G.21/1941, U.G.20/1945, U.G.20/1946, U.G.22/1947 から作成。

表10 缶詰工場の労働者数(1936-43年)

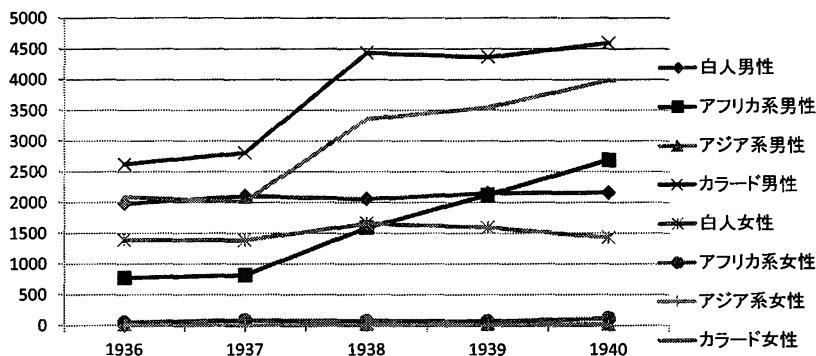
	ヨーロッパ系		アフリカ系		アジア系		カラード	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1936/37	1980	1391	776	52	23	0	2624	2090
1937/38	2108	1386	820	85	82	0	2811	2015
1938/39-40/41	2055	1658	1589	77	28	1	4436	3359
1939/40-41/42	2149	1595	2122	68	26	1	4363	3548
1940/41-42/43	2157	1429	2692	114	27	1	4592	3985

出典：*Census of Industrial Establishments*, U.G.39/1939, U.G.21/1941, U.G.20/1945, U.G.20/1946, U.G.22/1947  
から作成。

品のラインの背後での力仕事（労働者の職務では木箱の解体など、半熟練職以上の職務では缶の密閉のための圧縮など）を男性に任せ、手作業（果物の皮むきや種取り、カットなど）を女性に任せるという分担は必要であった<sup>47</sup>。とくにカラード、アフリカ人男性労働者は戦闘行為への参加が許されていなかったこともあり、戦時にも工場で雇用される非白人男性労働者は増加した。その結果、表10の労働者数の推移を示した図5に見るよう、1936～40年にかけてアフリカ人労働者とカラード労働者が工場労働の大半を担うようになった。

ただし1941年代に始まった生活賃金手当（戦時インフレ対策として、賃金別に等級分けされた上で賃金に上乗せして支払われる手当）、最低賃金法の整備に

図5 缶詰工場の労働者数、1936-1943年



出典：表10にもとづく。

より、人件費の抑制には歯止めがかかり、むしろ全体的には増加していた。さらにこれまでの非白人労働者の賃金の2～3倍にあたる、白人労働者の賃金は決して減少することがなかった。したがって、1940年代までに製造業の中でも脱技能化が顕著に進められた缶詰産業において、機械操作を含めたあらゆる作業に対する賃金の抑制が働いていた。企業はそのような制約下で、人件費の最も高い白人労働者から現地のカラード労働者とアフリカ系労働者の雇用促進へと転換を果たしていたのである。

## おわりに

1930年代からの第二次工業化期において食品加工産業では、輸出用製品の生産から国内の輸入代替化という変化が起きていた。戦時までの輸出用製品の生産の飛躍的な増大には、1920年代からの農業への保護関税・交通インフラの整備など政府の間接的な支援がかかわっていた。その一方で、企業形成にはむしろ、西ケープ内陸部における農場主の中からの工業化への接近が見られた。缶詰産業の形成は、当時の世界的な技術水準とそれを補う労働者の雇用の方法を考慮すると、他の地域との共通点を見つけることができる。

このように缶詰産業の形成と同時にアフリカ人労働者の雇用が戦時から飛躍的に伸びていく兆候は、製造業で起きていた全体的な変化と一致している。ただし、1930年代からアフリカ人労働者が増加し、部分的に監督職や技術職に浸食していく背景には、都市化の水面下で起きていた、季節労働者による小規模の流動を加味する必要がある。缶詰産業は農場労働者を工場に採用するという事情から、まさに農業と工業の間の密な関係に支えられていた。

また工場内の労働力構成における議論では、一概に女性労働者の増加のみを強調することはできない。戦時生産体制下で白人女性が減少する一方、白人・カラード男性労働者とカラード女性労働者の数は、アフリカ人女性労働者数を除き、ほぼ同等に伸びた。とくにアフリカ人男性労働者の工場進出は、1940年代から工場で起きた機械化と脱技能化の役に立った。1930年代の保護政策に対応し、地域経済における労働力構成が変化する中、南ア缶詰め産業は対英輸出から国内市場の開拓への移行を果たしたのである。

## 注

- 1 安価な労働力が果たす工業化の役割を強調したA・ルイスの「経済発展と無限の労働力」理論は、後発工業化論の典型として挙げることができる（ギャレス・オースティン・北川勝彦「アフリカ経済史研究の回顧と新展開」川端正久・落合雄彦編『アフリカと世界』晃洋書房、2012年、95頁）。
- 2 ルイスの研究から派生して南ア史では、20世紀以降の白人政府・企業が安価な労働力を獲得するために、アフリカ人労働者が農村社会と都市部の間を行き来する「二重経済」と呼ばれる経済システムを形成したとされてきた（峯陽一「アメリカの経験、南アフリカの経験」、川島正樹編『アメリカニズムと人種』名古屋大学出版会、2005年、341頁；H. Wolpe, "Capitalism and Cheap Labour Power in South Africa: From Segregation to Apartheid", in W. Beinart and S. Dubow, *Segregation and Apartheid in Twentieth Century South Africa*, N.Y., 1995, pp. 60-90）。
- 3 S. Marks and R. Rathbone(eds.), *Industrialisation and Social Change in South Africa: African Class Formation, Culture and Consciousness 1890-1930*, New York, 1982, pp. 9-10.
- 4 J. Nattrass, *The South African Economy: Its Growth and Change*, Cape Town, 1981, p. 176.
- 5 たとえば製鉄業における科学的経営の導入の際の、経営者と熟練労働者の間の攻防については、E. Webster, *Cast in Racial Mould: Labour Process and Trade Unionism in the Foundries*, Johannesburg, 1985.
- 6 B. Freund, "The Social Character of Secondary Industry in South Africa, 1915-1945", pp. 78-119, in A. Mabin(ed.), *Organization & Economic Change*, Southern African Studies Vol. 5, Johannesburg, 1989, p. 104.
- 7 J. Lewis, *Industrialization and Trade Union Organization in South Africa, 1924-1955: The Rise and Fall of South African Trade Council*, Cambridge, 1984, pp. 88-131. ただし新しい機械を用いた生産体制を導入すると同時に雇用を伸ばすことも意図されたため、従来からの熟練労働者の地位は維持され、監督官という立場から、新たな技術者との間のさらなるハイアラーキーが再生産された、という。
- 8 P. Alexander, *Workers' War and the Origins of Apartheid: Labour and Politics in South Africa, 1939-1984*, Ohio, 2000, pp. 17-20.
- 9 N. Worden, *The Making of Modern South Africa: Conquest, Apartheid, Democracy*, Oxford, 2007, p. 64.

- 10 北川勝彦『日本—南アフリカ通商関係史研究』(日文研叢書13、国際日本文化研究センター、1997年) 54頁。
- 11 J. Iliffe, *Africans: The History of A Continent*, Cambridge, 2007, p. 276.
- 12 League of Nations, International Trade Statistics, 1933, 1935, 1936. 一方1930年代の日本からの積極的な対南ア輸出の動向については、北川勝彦『日本—南アフリカ通商関係史研究』第3章を参照。
- 13 A. Jeeves, and J. Crush, *White Farmers, Black Labour : The State and Agrarian Change in Southern Africa, 1910-1950*, Durban, 1997, pp. 10-15. 本論文が関係する落葉性果実の場合、1トンあたり2ポンド8シリングの輸出助成金交付と、輸入規制が敷かれていた。C.S. Richards, "Subsidies, Quotas and the Excess Cost of Agriculture in South Africa", *South African Journal of Economics*, Vol. 3, 1935; Appendix.
- 14 ランドバンクは、南ア連邦設立直後から始まる政府の飢餓対策・農地改良政策の中で、白人農民共同組織を対象にした土地・機械購入などを支援する目的で、1912年に設立された金融機関である（前掲注12 p. 9.）。
- 15 前掲注13 p. 10.
- 16 Union of South Africa, Board of Trade and Industries, "The Fruit and Vegetable Canning Industry", Report 296, 1947, pp. 84-87.
- 17 League of Nations, *International Trade Statistics*, 1933, p. 291: 1935, p. 288: 1936, p. 289.
- 18 農林水産局『阿弗利加水産調査報告書』(昭和11年3月) 140-141頁。
- 19 前掲注4 p. 80.
- 20 Union of South Africa, Board of Trade and Industries, *The Fruit and Vegetable Canning Industry*, Report 253, 1939, p. 74.
- 21 志賀岩雄「世界食品罐詰貿易の展望 其四」『罐詰時報』日本罐詰協会、19卷1号、1942年1月、44頁。
- 22 前掲注16 p. 75, Table 14.
- 23 44年に25工場あるうちケープでは18工場、ナタールでは7工場が運営されていた。Union of South Africa, Office of Census and Statistics, *Report of the Agricultural and Pastoral Production of the Union of South Africa*, U.G.12/1932, U.G.44/1935, U.G.54/1936, U.G.59/1937, U.G.18/ 1939, U.G.31/ 1940, U.G.27/1941, U.G.77/1948, U.G.57/1949, U.G.30/1950.
- 24 前掲注16 pp. 2-3.

- 25 D. J. van Zyl, *Langeberg: 50 years of Canning Achievement, 1940-1990*, Cape Town, 1990, pp. 19-22.
- 26 前掲注 25 p. 32.
- 27 前掲注 16 p. 15.
- 28 前掲注 16 p. 20.
- 29 前掲注 16 p. 24.
- 30 前掲注 13 p. 21.
- 31 1913年の土地法によって白人農場主への最低90日以上の労働提供なしに、アフリカ人へのシェア・クロッピングや土地貸与を禁じられて以降、現物供給や現金収入と引き換えに労働力を提供する制度として拡大したのが労働小作制度（Labour Tenancy）である（W. Beinart, *Twentieth Century South Africa*, Oxford, 2001, pp. 53-61.）。労働小作制度の契約には、特定の祭日のみに雇用されるなど、地域ごとに雇用形態に差異があり、そのうち特定の農作業の目的のために雇用される労働者が「季節労働者」と呼ばれていた。（E. S. Haines, “The Economic Status of Cape Province Farm Native”, *South African Journal of Economics*, Vol.3, 1935, p. 57.）。
- 32 前掲注 31 p. 57.
- 33 前掲注 31 p. 58.
- 34 1933年時のセンサスではカラードの農業労働者はナタールで709人、トランスヴァールでは3,048人、オレンジ自由州では2,992人であったのに対し、ケープ州では6万7,921人にのぼった。（Union of South Africa, *Report of Commission of Inquiry Regarding the Cape Coloured Population of the Union*, U.G.54/1937, p. 75.）
- 35 前掲注 34 p. 75.
- 36 前掲注 34 p. 75.
- 37 大阪市役所産業部貿易課『大阪の缶詰産業』（1937年）87- 92頁。U.S. Department of Labour, Women's Bureau, *Women in the Fruit-Growing and Canning Industries in the State of Washington: A Study of Hours, Wages and Conditions*, Washington Government Printing Office, 1926, pp. 25-34.
- 38 日本缶詰協会専務理事の星野佐紀は、1941年9月にケニアからタンガ（タンザニア北端）・ザンジバル諸島をとおってダーバンに上陸後南部アフリカ各都市を回り、カナリア島をとおってイギリスに上陸し、ヨーロッパを巡る視察旅行の感想を報告している。南アフリカの缶詰事情については、「相当の進歩をしておりまして、果物の罐詰（マ

- マ) が二十四・五軒、海老の罐詰(ママ)が二十二軒ばかりあります」と言及し、持ち帰った缶詰製品を報告時に披露している。星野佐紀「海外罐詰市場調査報告」『罐詰時報』、19卷6号、1942年6月、6-7頁。
- 39 前掲注25 pp. 34-36.
- 40 大阪市役所産業部貿易課『大阪の缶詰産業』、121-122頁。
- 41 前掲注4 “The Social Character”, p. 89.
- 42 Simons Collection, Z.2.1.2.2, p. 4.
- 43 Simons Collection, Z.2.1.2.2, pp. 3-4.
- 44 Simons Collection, Z.2.1.2.10, p. 3. 1947年5月に、ランゲベルク工場内で二名のアフリカ人労働者が、アフリカ人監督官の George Klaas を襲撃したことから、モンタギュー地方裁判所で企業対労働組合訴訟として争われた。この事件は、ランゲベルク労働者が多く参加していた食品缶詰労働組合(FCWU)側からの示談金申し入れによって終息した。
- 45 前掲注25 pp. 27-28.
- 46 R.H. Smith, “War Time Control of Price in South Africa”, *South African Journal of Economics*, Vol. 9, No. 4, 1941, p. 407.
- 47 Report 296, p. 47.

## 参考文献

### <日本語文献>

大阪市役所産業部貿易課『大阪の缶詰産業』1937年。

北川勝彦『日本—南アフリカ通商関係史研究』(日文研叢書13、国際日本文化研究センター、1997年)。

志賀岩雄「世界食品罐詰貿易の展望 其四」『罐詰時報』日本罐詰協会、19卷1号、1942年。  
農林水産局編『阿弗利加水産調査報告書』農業と水産社、1936年。

星野佐紀「海外罐詰市場調査報告」『罐詰時報』日本罐詰協会、19卷6号、1942年。

峯陽一「アメリカの経験、南アフリカの経験」、川島正樹編『アメリカニズムと人種』名古屋大学出版会、2005年、329 - 353頁。

<外国語文献>

- Beinart, W., *Twentieth Century South Africa*, Oxford, 2001.
- Freund, B., "The Social Character of Secondary Industry in South Africa, 1915-1945", pp. 78-119, in A. Mabin(ed.), *Organization & Economic Change*, Southern African Studies Vol. 5, Johannesburg, 1989.
- Haines, E. S., "The Economic Status of Cape Province Farm Native", *South African Journal of Economics*, Vol.3, 1935, pp. 57-79.
- Iliffe, J., *Africans: The History of A Continent*, Cambridge, 2007.
- Jeeves, A. and J. Crush, *White Farmers, Black Labour : The State and Agrarian Change in Southern Africa, 1910-1950*, Durban, 1997.
- League of Nations, *International Trade Statistics*, 1933, 1935, 1936.
- Lewis, J., *Industrialization and Trade Union Organization in South Africa, 1924-1955: The Rise and Fall of South African Trade Council*, Cambridge, 1984.
- Marks S. and R. Rathbone(eds.), *Industrialisation and Social Change in South Africa: African Class Formation, Culture and Consciousness 1890-1930*, New York, 1982.
- Nattrass, J., *The South African Economy: Its Growth and Change*, Cape Town, 1981.
- Ray and Simons Collection (in University of Cape Town, Government Publications Library), Z.2.1.2.2, Z.2.1.2.10.
- Richards, C.S., "Subsidies, Quotas and the Excess Cost of Agriculture in South Africa", *South African Journal of Economics*, Vol. 3, 1935, Appendix.
- Smith, R. H., "War Time Control of Price in South Africa", *South African Journal of Economics*, Vol. 9, No. 4, 1941, pp.400-415.
- Union of South Africa, Board of Trade and Industries, "*The Fruit and Vegetable Canning Industry*", Report 296, 1947.
- Union of South Africa, Board of Trade and Industries, *The Fruit and Vegetable Canning Industry*, Report 253, 1939.
- Union of South Africa, Office of Census and Statistics, *Report of the Agricultural and Pastoral Production of the Union of South Africa*, U.G.12/1932, U.G.44/1935, U.G.54/1936, U.G.59/1937, U.G.18/1939, U.G.31/1940, U.G.27/1941, U.G.77/1948, U.G.57/1949, U.G.30/1950.
- Union of South Africa, *Report of the Commission of Inquiry Regarding the Cape Coloured Population of the Union*, U.G.54/1937.

U.S. Department of Labour, Women's Bureau, *Women in the Fruit-Growing and Canning Industries in the State of Washington: A Study of Hours, Wages and Conditions*, Washington Government Printing Office, 1926.

Van Zyl, D. J., *Langeberg: 50 years of Canning Achievement, 1940-90*, Cape Town, 1990.

Webster, E., *Cast in Racial Mould: Labour Process and Trade Unionism in the Foundries*, Johannesburg, 1985.

Worden, N., *The Making of Modern South Africa: Conquest, Apartheid, Democracy*, Oxford, 2007.

Wolpe, H., "Capitalism and Cheap Labour Power in South Africa: From Segregation to Apartheid", in W. Beinart and S. Dubow, *Segregation and Apartheid in 20<sup>th</sup> Century South Africa*, London and NY, 1995, pp. 60-90.

# The Emergence of Canning Industry in Western Cape, 1930-1940s : South African Second Industrialization in Rural Economy

MUNEMURA Atsuko\*

In the history of latest-developed industrialization, “the dual economy” theory pointed out that brutal labour policies had compelled cheap indigenous workers to move between urban and rural area. In the case of South Africa, economic historians also argued that the gold-mining industry had caused the mobilization of cheap migrant workers since late 19th century. This was called as the mining revolution or first industrialization.

But the position of the mining industry in South African industrialization was taken place by the manufacturing industry until 1930s. Several latest studies discussed how abundant labour was supplied to the manufacturing industries, and how their labour structure changed in 1930-40s. This study, taking an attention to the agri-industry in Western Cape, proves that one of manufacturing industries has been supported by intra-rural mobility of seasonal workers.

In South Africa, the development of manufacturing industries means the emergence of import-substituting industries. The food industry was the oldest one in manufacturing industries because it was emerged in order to provide necessities for labour engaging in the mining industry. In 1930s, this industry had turned to be export-oriented under South African protectionism policy, and under the war-time economy it progressed more rapidly than ever.

This study defines this development as the second industrialization, and shows how the canning industry grew up to be export-oriented in this period. Like the mining industry,

---

\* Graduate School of Letters (M.A.), Master's degree holder, Osaka University

canning companies were eager for abundant cheap labour. However, they did not force but propose seasonal work to farm workers, in which workers can make use their off season to earn high wage in factories. In canning industry, it is key point that the supply of seasonal workers matched to an adoption of the taylor-system in rural factories.

About the adoption of the taylor-system, P. Alexander pointed out that the mechanization failed to be accomplished in 1930s, and a large number of employments of female workers made up for the growth of productivity. This study examines the labour structure with industrial census from a point of view of race and gender. Female workers, as Alexander said, occupied almost all the preparation for canning fruits or vegetables. However, male workers outnumbered female through the Second World War. White female worker were employed in order to fill up deployments of male workers after the Great Depression, but in late 1930s, white male workers came back to factories. A following decade, a lot of non-white male and female workers were employed for non-skilled works under supervisions of white male workers.

Non-white seasonal workers can earn so high wage to make up for their low income from farm works by engaging non-skilled works in factories. This is an important merit which the agri-industry proposed to them. This study concludes that one of manufacturing industries was supported by the business effort to acquire abundant labour without relying on migrant-compelling policies.